



東京行幸供奉之時讀此歌  
 明治二年季和詠草  
 自筆  
 明治二年後献上其外歌題

特別  
 ^ 2  
 4867  
 27



東本堂供奉之時  
所及之  
四



予の如く文才を越す所

若くは愛する人よ言をさめ此亦代りうつものこと

一 今昔房の雨半障りうりしり山をさるる言の如く

予き平歌の如くありぬこと

八隅の如くは落すうれとあしはさよの控りもをぬり

西京の如く実政の如く評より

大鳥の如き雨威よりへていづれぬむしり

安んじくも雨後の言をれとあしと富むれ山もさぬ

大鳥兵衛教うしり始て語れりてつとさうさのあけや

時をとりそを作く所なきこととらるる

此の如く山はぬさく時をさるるや落きこるる事

十二月五日献上大猿熊の事今そ言連座を作りて

遊之の形つづり

犬といはれぬもしりも言の如くいづくも白くして

別紙

門とちり犬うつお本よ作る得とつ子孫のつとめてあつと

しりてせうつ遊座のつと作りたを揚りて二つとあつと作

るとはさるるに老木は事の一云はれぬことやいれぬ

とんといはれぬ之の言の月をさるるに二つとあつと

又も作るとはあつとあしわいふはつとつとつとつと

中あつたてまつりて電の許りそいふとつと

後日思出十一月四日牧奉宿之間辨事古大弁言相因

宿也木之実形造る菓子に猶しは流一音

予返り

又彼卿

又彼卿

嬉しやと比るとはこととあつとあつとあつとあつと



初春の比鳥書にあらて内より来たるを越中納言此  
物波然りあそむわくわく

おはつこころのこころをわくわくあそぶるる春鳥あそぶるる  
是のこころを春鳥さうあそぶるる春鳥あそぶるる

二月十四日 菅田番ニテ中納言屋敷御前献上

庭春雨

こころをわくわくあそぶるる梅の本をわくわくあそぶるる  
いとしくあそぶるるあそぶるるあそぶるるあそぶるる

同月十八日 献上以同御直ニ由沙汰也

今乃をよもて梅を一種にわくわくあそぶるるあそぶるる  
あそぶるる 作しとあそぶるる

あそぶるるあそぶるるあそぶるるあそぶるるあそぶるる

同夜 六角大藏大輔古歌深毫天望則返送之

時其色紙

抄りぬもしゆまといふまのり人あし〜

三月二日 奉番之役鉢植小松 本在毛植丹頂鶴三羽 離二羽之

伴松実成取於小塩山也過日 大原野祭奉向以時止

三産之意献上之時

子也万也とわとて大原や 伴松実成り〜

同日 慈光寺有仲御許ヨリ以来翰花枝副一首

被強し其之

抄り了る不離りあし家とる〜

ともあ母うう様うをとりてひ〜

三月七日 御東行供奉出立之時

出雲路大和守御

行幸よし陰ふ〜

右邊に東着し故

十六日宮ノ泊ニ千秋加賀寺、祿名庭方ノ躰躰ノ

花ニ添テ申

一枝りつしよあ〜

今夜猫ノ実ヲ持後リタルニ

〜へてい海も浅し〜

十八日 躰躰花ヲ持後所礼以和方可申上、

有文御社 伴傳即属干其御使

名つし思を〜

十九日 二川ヨリ吉田ニ過行路ノ間松林ニ此如ヨリ始テ

富嶽ノ見エタルニ





多うとに心をしほくはとつらうもあしあうに  
 新立へともあつてさうのあきうれはたゞいふことも  
 ありやうとてさうの酒のいたるに吾々のあつた  
 後子承を二交考をけりてあつたはれと老か  
 せりてさうの酒のいたるに吾々のあつた  
 しるしとてさうの酒のいたるに吾々のあつた  
 七条しとてさうの酒のいたるに吾々のあつた

三好ぬきおのりさうの朝

酒もあつたさう

朝とあつたさう

同月十三日今日吹上 渡御伴之馬庭猿ノ腰掛ト云ル物  
 アリケルヲ人ノ取リテ入 亦乞ヌルニ云フヨリト  
 御ノ有ケレバ  
 女様乃らさうの酒のいたるに吾々のあつた  
 此形あつたさうの酒のいたるに吾々のあつた

同月十六日吹上 瀧見以茶座 坊々せ終ふ由依子  
 坊々さうの酒のいたるに吾々のあつた  
 坊々さうの酒のいたるに吾々のあつた  
 坊々さうの酒のいたるに吾々のあつた

五月十日 此すの一般なきてさうの酒のいたるに吾々のあつた

二日白田八之進 正秋 翟麦ノ餅ニ植タルヲ贈リ見美系 群し  
 警目名也 歡喜ニ余飯一前 記于短冊 与し  
 愛計八師 此をさうの酒のいたるに吾々のあつた

同月 石山基文 卿乃許より 死巨浦をわし  
 されさうの酒のいたるに吾々のあつた

ふかふかに心くし 寝たれといへるもらしあうに  
あまふもあふすてふのあきうれ 然るにこそむす  
あふすを就てこの子を酒のいたるに 吾の影をか  
終ふ家こそ二交考を けさるん 老か  
たれへて 幸うあふすのい  
しし <sup>七味し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ

三好ぬき <sup>多し</sup>酒もあふ <sup>七味し</sup>七味し

同月十三日今日 暎上 渡御伴之馬庭 猿ノ腰掛ト云ル物  
アリケル人ノ取リニ入 未定又ルニ云フコト  
御ノ有ケレバ  
君ノ為ニ <sup>多し</sup>や猿乃 跡にむ 是 <sup>多し</sup>家取 然るに  
若猿乃 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 又 <sup>多し</sup>家取  
此形 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 如く <sup>多し</sup>いといふ

同月十六日 暎上 瀧見 以茶屋 坊々 世終ふ 未定  
信々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ  
を <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ  
坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ

五月廿日 暎上 此す <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 一 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ  
今 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ

同月廿一日 暎上 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ  
申 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ  
任 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ

同月廿二日 暎上 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ  
坊 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ  
同月廿三日 石山基文 卿乃 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ  
坊 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ 坊々 <sup>多し</sup>いといふ <sup>七味し</sup>いといふ

あつて誰より愛をむかひに任やとに一本とさきしころを  
二五とあへずるうらひ

うつらとぬきあふるにあやとあやと好しといふ外にぬし

同月廿九日 敬直母長と誦し

敬直母長と誦し

用ひたりとて酒のあやとあやと好しといふ外にぬし

又女府よりとも又好しといふ外にぬし

これそれとも云々と云ふ外にぬし

これのあつて仰せしころはかくぬき誦し

たふし

予とおあし

あやめまの袖をかき今りしころはともと云々 都は子に

同月九日 敬直母長と誦し

郭ら

郭らつるころはともと云ふ外にぬし

あつて誰より愛をむかひに任やとに一本とさきしころを

五月兩

あつて誰より愛をむかひに任やとに一本とさきしころを  
あつて誰より愛をむかひに任やとに一本とさきしころを

同月十下 松平圖書頭より下やしきを修てまうら

たうに池にこつたうらしたる海老をゆりて誦し

敬直母長より誦しやうと

はゆたのあつて誰より愛をむかひに任やとに一本とさきしころを

あつて誰より愛をむかひに任やとに一本とさきしころを

敬直母長より誦しやうと

同月十下 敬直母長と誦し

月二日 郭ら

あつて誰より愛をむかひに任やとに一本とさきしころを

あつて誰より愛をむかひに任やとに一本とさきしころを



川水に松葉ノ散リ人ノ見え  
秋風をる浪のうたゝし流るる我々をわらふおぼて留るる

同月十日香葉（抄） 堀川町三佐館三席書ノ積

美女湯より上り花姿

誰とめくられお湯よりゆくまゝ人のあふといかめつけり

同月十日（抄） 堀川町三佐館三席書ノ積

夏雨

涼しき雨の多きも秋上りぬゆく早のるれは地々

本此れも秋の末（抄） 初秋快雷一叫何時刻 重風

梅雨霽来猶未休稻青鏡長近初秋快雷一叫何時刻 唐孝

書畫暗客忘思已悠

重風（抄） 多き雨の多きをうけて世まじくをぬしては苦らひく

とドてこれれは

おぼろくおぼろくもまほしきまほしきもまほしきもまほしきも

又重風（抄） おぼろくくまほしきもまほしきもまほしきもまほしきも

冬に

おぼろくくまほしきもまほしきもまほしきもまほしきも

郭（抄） 一帯たもあつて上り道を便りにまほしきもまほしきも

かくドもまほしきもまほしきもまほしきもまほしきも

まほしきもまほしきも

又

まほしきもまほしきもまほしきもまほしきも

又重風（抄） おぼろくくまほしきもまほしきもまほしきもまほしきも

まほしきもまほしきも

同月十日香葉（抄） 堀川町三佐館三席書ノ積

鴨川

深き川と物もあつてうらやまも水川の水もあつてうらやまも

同月十日香葉（抄） 堀川町三佐館三席書ノ積

おぼろくくまほしきもまほしきもまほしきもまほしきも

同月十日香葉（抄） 堀川町三佐館三席書ノ積

おぼろくくまほしきもまほしきもまほしきもまほしきも

おぼろくくまほしきもまほしきも

おぼろくくまほしきもまほしきもまほしきもまほしきも

又中山町其屋三ツリテ水廻りもあつておぼろくくまほしきもまほしきも

同月亦 堀川新三佐 老京大夫ホヨリ見立ヲ贈テタルニ後日  
申をス

七月二日 康隆マヨリ書牒ヲ贈テルトテ

様ヲあし未乃棚ハ夫ホアノ母ノシ 喜平ホムしてとけ

カク言オコサレタルニ取アヘズ也

巻ノモトニ書ヨリてモウモシヤノ外ホアノ母ノ棚トシテ

後日抄法可棚トシテモヤノ外ホアノ母ノ棚トシテ

二月六日 庄田ノ行ハ老時所略

残書

秋モモト陽ホアノ母ノ棚トシテモヤノ外ホアノ母ノ棚トシテ

二月七日 庄田ノ行ハ老時所略

七月 庄田

まらぬとて人の心をむくも七星よりとも是れいづれ  
むつとさしめたるもいづれとて行はむとてさるなり也

四月十日 康隆マヨリ和言書牒ヲ贈テトテ言ヤレ

以文ヲ贈ルモトテ書ヤレ名ノハヨリハアノ母ノ棚トシテモヤノ外ホアノ母ノ棚トシテ

康隆マヨリ

以文ヲ贈ルモトテ書ヤレ名ノハヨリハアノ母ノ棚トシテモヤノ外ホアノ母ノ棚トシテ

四月十日 高孝不山小恙也 相書衆ニシテ長谷四佐

會也四佐ハハ批書ニ添テ申セテ書方狂吟只替戲ニ至也

名ノハヨリハアノ母ノ棚トシテモヤノ外ホアノ母ノ棚トシテ

去有返方注テ左

以文ヲ贈ルモトテ書ヤレ名ノハヨリハアノ母ノ棚トシテモヤノ外ホアノ母ノ棚トシテ

同月十日 毛利送三佐 平望平 體

銀之書 月乃加款 庄田付 體

抄ノモトニ書ヨリてモウモシヤノ外ホアノ母ノ棚トシテ

以文ヲ贈ルモトテ書ヤレ名ノハヨリハアノ母ノ棚トシテモヤノ外ホアノ母ノ棚トシテ

或人ハ書封ノ子贈リたる也 以文ヲ贈ルモトテ書ヤレ名ノハヨリハアノ母ノ棚トシテ

或人ハ書封ノ子贈リたる也 以文ヲ贈ルモトテ書ヤレ名ノハヨリハアノ母ノ棚トシテ

乃若き事ハ風の音の遠く分るよとてしるをうら  
るをみるにそし肝心なき巧まはる風流ありと  
ねえ是う歌を言てらや唐詩の乞申とるに  
猶舟にいらむとて諾ひしや地うまの舟にあら  
況く流舟一つ色きイナ唯イナ先イナ知る  
多能詞よりしるイナ相イナおイナはイナしイナしイナしイナ  
かき志を明後とて年終二を文四十より二の東  
京乃彼に会して書けり也

正二位季公

同月十三日當番之風ノ烈なりケレ修長公  
風を免して子け終るに終る猶極の時とされ下詔う  
是を新しき年ふきにけりしははしりしははしりし  
同月十五日龜井館ニテ

同月十六日 堀川形に三尾富士宮に四尾ホ同伴 西國橋へ過  
遊定洋法枕橋ト云橋ノ由往歴し時  
玉々しけ二つ双へるすの橋をふらりしを流流けり

同月十九日 當番ニテ所當座

虫聲年非一

夕うけ七尾をこれとて書りおもてあつてふとてしる  
るの書り書るれと秋のの長きをいひし書りし  
同月十八日 當番ニテ 入申之後以恩夜故ト云文ヲ可讀  
此方被上ノ 係言之有ケレ不取敢  
今も此のいふべき物ありしをいひしははしりしははしりし  
こゝろははしりしははしりしははしりしははしりし

八月一日 画讚二枚 梅溪 不望

花月

わらをや安しといふん之方此月も白く

花も白く

雪ノ  
富士

赤くしてあつた此のうらもいそがしく

雪も白く

同日目 嘉多 徒之任轉宅祝之由云乞朝日依於請行向丸之建坂

関ノ形ヲ作りテ祝之ヲ強リモストテ

右坂や是の形等うらしくよといふうらるるの勢をひくさる

同月五日 吹上 行幸之時

百子此をよみて秋風吹上るをよみて神あふ

同月二日 英王于慈願之 御制之事 予此代作

可申上之由女府殿沙汰也即九之二首入 街讚

之如点、方亦決定也都令其甚長連、至既既既

皇者感

天地のいやさ長くをすこれとあふをわれを福ん

武を治るるを治るるも天地のよき母よとてくさへりり

同月九日 於清殿御書

秋鳥

鳥の心ありてやまこれをも母とて鳴る

いさむら

同月十日 入の事代 高功 高ニテ 高ニテ

高長を二徳を二方ヲ 高ニテ 高ニテ

高トテ 高トテ 高トテ 高トテ

同月十日 於地 天造言其法能丹其極其体自是

高をよむ

梅もは揚もあつたやとてあつたをひけ

秋風をよみてとてあつたをよみてあつた

高をよむ

丹其極 高をよむ

丹其極 高をよむ



八月一日 画讃二枚 梅彦 不望

花月修

わらをや安しといふん之方此月も白く

花も白く

雪ノ富士

清くして雪は此のうらもく雪はくちり 雪はきこふ

むくはく

同日目 嘉多 往之任轉宅祝之由云乞朝日依於請行向之建故

園ノ形ヲ作りテ祝言ヲ授リモストテ

女枝や是の折葉のうらくよいこもくぬるのう 物とひくく

同月五日 吹上 行幸之時

百子此をよみて秋風の吹上るをよみ 神あふ

同月十日 英王子懇願 御制之事 弟代作

可申上之由女府殿沙汰也即尤之二首入 街譚

之如点、方未決定也都令其甚急速に至致致致

聖者達感

天地のいやさ 長子をすこれとあふをわれを福ん

武を治るくを治るくも天地のふも母よとくくへりり

同月十五日 高上屋三任ノ許ヨリテ 心あつた

いふ我のふもを治るくも母よとくくへりり

心

いふ我のふもを治るくも母よとくくへりり

いふ我のふもを治るくも母よとくくへりり

同月十日 入の事代 高上屋三任ノ許ヨリテ

高上屋三任ノ許ヨリテ

高上屋三任ノ許ヨリテ

同月十日 高上屋三任ノ許ヨリテ

同月十日 高上屋三任ノ許ヨリテ

高上屋三任ノ許ヨリテ

高上屋三任ノ許ヨリテ

高上屋三任ノ許ヨリテ

高上屋三任ノ許ヨリテ

高上屋三任ノ許ヨリテ

高上屋三任ノ許ヨリテ

ふらふらとすねて有るに似し  
申すに似しに似る様うたふけてあふらふ言葉を  
又丹集り

ふらふらとすねて有るに似し  
申すに似しに似る様うたふけてあふらふ言葉を

同月十九日 音高書ニテ音高屋

携在

おしきと都のさくらもあはれに成らぬををらめてやる  
こゝろをれ歌ときをあらわしけり  
可成り返り 作下お返し可申上し由也

此上をの書きタリ此歌

おしきと都のさくらもあはれに成らぬををらめてやる  
こゝろをれ歌ときをあらわしけり

こゝろをれ歌ときをあらわしけり

こゝろをれ歌ときをあらわしけり

かしこいけりと思ふに

あふらふ言葉を

あふらふ言葉を

あふらふ言葉を

あふらふ言葉を

あふらふ言葉を

あふらふ言葉を

あふらふ言葉を

あふらふ言葉を

あふらふ言葉を

後日高也

同月十七日 泰宿徒然之間 俣思之詞 花歌

八月十なり七つと日宿直乃目にあん形也と朝津

良光お此朝長はさきと恙乃者として

かきらひ乃夕つ方よりあつこ

けしきり 柝の夜といひ

うち成るこゝろをさや日毎仰る

月のせうくとおあふらふ言葉を

も嬉しくわくも月と也あつと思ひ〜こといし清く  
に流波るうまはく〜綾巻教もあつぬら葉  
の露ひろひに拾ひるにらんこそ描きぬたさ  
片や〜いし

浮雲乃志す〜残るも申く〜に月乃〜とわらんわとや  
おとつ日も此るも面よりさうわつ〜と公ハ晴よまらら乃月  
宿ま〜してさそ出〜さ秋の月流〜ん方ハつちるを  
九月ノトニそ七付き

九月七日 醍醐館行向ノ如ハ勸可之懸詔ノ時

老くはるももひら〜  
忠類〜  
もん〜

同月九日 菅田番ニテ中ノ座

勸教

大馬の承代なつ〜月比〜く菊此を〜とあ〜むらあ〜とさ  
ちり〜とを〜物よハ〜の〜とを〜れぬ〜とさ〜とさ〜

同月十三日 今ノ由菅田座在来会詔進

十三夜 雅典ハ歌々

とや〜と〜秋〜も〜中〜に〜秋〜より〜母〜宮〜つ〜つ〜月〜比〜し〜ひ〜こ〜の〜妻  
玉〜く〜し〜け〜こ〜ま〜わ〜ら〜る〜月〜こ〜の〜秋〜つ〜し〜田〜根〜の〜之〜ゆ〜も〜を〜れ

同夜 高止家行向之時ハ勸可之夫鳥兵衛教可席ニ就

兩人有詔おす〜と述鄙志如左

長月終る乃〜こよれ〜の月〜と〜も〜起〜と〜も〜ら〜れ〜る〜あ〜く〜や〜来〜し〜記  
竹若つ〜る〜信〜進〜と〜さ〜ら〜し〜

又〜と〜ん〜と〜ぬ〜ら〜時

〜と〜と〜月〜乃〜下〜さ〜こ〜え〜ら〜多〜し〜あ〜つ〜と〜の〜を〜と〜こ〜し〜

同月九日 菅田番ノ御馬

色〜跡〜あ〜り〜献〜上〜し〜ら〜い〜日〜ハ〜作〜下〜是〜名〜也〜連〜ハ〜臣〜離〜也

以献上

波り〜さ〜る〜あ〜ら〜れ〜た〜も〜あ〜ら〜ら〜〜と〜〜と〜人〜あ〜れ〜る〜人〜あ〜ら



同月三日當番三ノ神當座 未收予献上

初冬

未收ちりし時多母ふりつあやもらし以ら然る事しとあは  
いとやもる能なしき此華よりと指れ後とるる事  
同月五日といふ日古筆より伝連三ノ師昌澄のす  
巻よりお筆よりやんと初書りたるはひりも  
西宮山五信よりとるる事し  
是りたれとありたるに西宮山よりかゝる事  
ちんちん書りし事しとてはあつたを記して又もら然る事  
時多母より限るはもら然る事し  
君におもひ中よりしやお筆よりとるる事し  
はりし事し  
ちんちん書りし事しとてはあつたを記して又もら然る事  
ちんちん書りし事しとてはあつたを記して又もら然る事  
お筆よりとるる事しとてはあつたを記して又もら然る事

同月六日依 作献上未收予も竊に後を録し

庭後集

晴雨晴陰

見残集

朝霜

寒樹交松

推案

氷弦依

池水鳥

河千鳥

連日雁鳥狩

同月九日迄 行年之由庭ノ形

三

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

此七

持と此まゝに傳へしに改めしと云ふ名之由

此五

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

同月十四日迄 民部より未仕位皇位長年より神祇之由

短冊一枚(長尾) 長尾之支所則 爲千未仕位皇位長年より神祇之由

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

同日 改川 皇位長年より神祇之由

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

同月十五日 西高止より玉川色紙 係

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

玉川やいふを改めしと云ふ名之由

同月十六日 岳嶺町 虎皇御在 係

一幅 富士山より 春ノ山ト 夏ノ山ト 由

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

同月十七日 根津社 奉斎神職 井上某 係

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

根津社 奉斎神職 井上某 係

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

根津社 奉斎神職 井上某 係

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

古筆より 伸より 奉斎神職 井上某 係

此等と此れと此をちり改めしと云ふ名之由

中壇の赤き御幣の旗を立ていよいよ大々として祀奉らるる也

直木杉のよりなる 以秋の大宮人よりなる 此の御幣のよりなる  
うきしつらうめとあらに好む也

又清瀨 此ノ方ニテ 豊ノ方ニテ 在るに海

此を世をたすつを鄙に言ふも心としんてやすしく  
言はれりとしんて言はれりといつに杉生り秋を何と云はれり  
かくるよ好む也

物をもよほす御やすしひし 不忠他の御とす  
或人より周知よ又もよほす御やすしひし 御やすしひし  
中をうききて御やすしひし 御やすしひし  
西之也の御やすしひし 御やすしひし  
の地ありし御やすしひし 御やすしひし  
老く御やすしひし 御やすしひし

四月廿八日 天久保 氏儀をいひし御やすしひし  
先干二社 まゝしてたらの御やすしひし 御やすしひし  
三ふりていよいよ 御やすしひし 御やすしひし  
今よて 御やすしひし 御やすしひし

初黒川 不忠の老しを御やすしひし 御やすしひし  
子に御やすしひし 御やすしひし  
豊岡の御やすしひし 御やすしひし

四月廿八日 富女所と御やすしひし 御やすしひし  
よりとす 御やすしひし 御やすしひし  
御やすしひし 御やすしひし  
御やすしひし 御やすしひし

四月廿八日 先以 御やすしひし 御やすしひし  
人をもあしく 御やすしひし 御やすしひし  
御やすしひし 御やすしひし

中垣の赤き紙をうらまひきていふやうし記承るるなり

首長柄のうらまひ、此紙の主人よりうらまひ記承るるなり

うらまひしつらめとあらはれり

又清瀧（此ノ字ニ）を乞ふに海より

かくまよはるる也

ゆきをよきなりやすしし平忍地のゆきなり  
或人より周知し又まよふて海より直にゆきなり  
水よりゆききてゆきなりてゆきなりしゆきなり  
西よりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり  
ゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり  
ゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり  
ゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり

日月より人よりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり  
先十二社、まよふたゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり  
ゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり  
ゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり

初黒川不保の毛を酒おせり人に席をあらり  
ゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり

豊岡よりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり  
ゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり

ゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり  
ゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり

玉の巻をあらり  
月八分は此園にゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり  
人共もあしくゆきなりゆきなりゆきなりゆきなり



婦人より乳の味よくすすかひききなりあけけくうつて  
淋したの味もまじりて天内の乳葉のとも浅く進めり  
好ましく乳葉のとも佳なり味しこまら部こまら

女はさうの地行ありし中をえん  
いふとさうの乳種あり言はるるをうんくをうんく母

同月九日

東園信地乳

加真庵の七十の乳を  
加わきこまら七十の乳を  
繪瀨 鳥長より極の味なり 真抄乳あり  
ゆき子ともちれをともちちちち極の味なり

極の味瀨

阿野乳

可き味つ白乳のともまじりしと乳けき此の味なりけり  
同月十日吹上 行幸之旅 御前賜敷蓋匠の御乳

干候

恩酒酒種乳を配前之令り風と流る  
あうしこ乳をいもいも極の味なり

侍及二白並申

竊聞鷹司殿に於て御乳中付を酔中之時感不地汚  
願也但聊致責能者彼可悦也可取元賢

同月十日音當番也御當座

文二兩

あまのりこれ乳をいもいも極の味なり  
やまのりこれ乳をいもいも極の味なり

同月十八日不忍池乃月とて或人此巻上



十二月四日當番侍従牛の賜御題

遠山雪 三ノ献上之

あし霞る遠山の小ききもむおとらふことほきなりつるわ  
久しき雪もやうらるる冬にけり遠山は雪のこぼれりよき雪

同月十日四山より死望其料帝御様より新詠

おとやうな一枝り菊もあはれ雪もあはれゆり八袖もあはれ雪

同日 若松縣大参事山本一節亭ニテ

山嶺初雪

おとやうな枝り菊もあはれ雪もあはれゆり八袖もあはれ雪

籠早梅

大方は雪の遠きもむおとらふことほきなりつるわ

遠きりよか若松縣、おとらふことほきなりつるわ

雪もあはれ雪もあはれ雪もあはれ雪もあはれ雪もあはれ雪

時厚羽木は遠きもむおとらふことほきなりつるわ

雪もあはれ雪もあはれ雪もあはれ雪もあはれ雪もあはれ雪

大なるそめきこころは清き死望其料帝御様より新詠

遠憶書き其詞古め危 新詠ニ思ふ

山本連夫ぬしを初くおとらふことほきなりつるわ

りやうな枝り菊もあはれ雪もあはれゆり八袖もあはれ雪

おとらふことほきなりつるわ

同月十日當番御當座

早梅 新詠ニ思ふ

おとらふことほきなりつるわ 雪もあはれ雪もあはれ雪もあはれ雪

同月十九日玉川紙ノ事 西高止ヨリ

玉川乃流く藤もあはれ雪もあはれゆり八袖もあはれ雪

おとらふことほきなりつるわ

おとらふことほきなりつるわ

おとらふことほきなりつるわ

おとらふことほきなりつるわ



改題

明治二年五月三日 御直獻上御題 過日從實則御作 沙汰也

三千首

山新樹	卯花	聞郭公	夕々	夜々
菖蒲	採早苗	五月雨	窓螢	夏月
野夏草	瞿麥	氷室	森蟬	扇風
納涼	六月後	瀧水清	田家	浦松
巖上苔	竹為友	庭鶴	池亀	川筏
樵歌	海眺望	旅行	迷憶	社頭祝

同年八月九日當夢以思而賦在夢中見其狀老不有觸

小題可必上云作下

馬上望 都 林采 宏 牛重崔  
酒 讀書 玉 大刀 寄車一祝

同年九月尔女房死望進入如左

十五首

子日 雉子 系機 盛花 杜若 首夏  
郭公 秋露 池月 庭菊 深雪 巖苔  
山家 旅宿 祝言

十五首

若菜 春曙 雲崔 野遊 薜躑 郭公  
冰室 秋露 鈴虫 對月 初雪 山雲  
溫泉 庭杏 神祇

右二通權典侍權中詞言世侍未可有分配申入

十五首

朝山霞 鶯暮 靜見花 摘莖花 河苗代 郭公遍  
庭明美 野虫 海邊月 初紅葉 雪中友 池水澄  
名所鶴 旅宿 灯 寄世祝

去天和進入

同月

子日松 霞中鳥 早殿 灯 七 善春夕 更衣 郭公頻  
初程風 七夕琴 見月 夜時雨 遠山雪 長新情 窓外  
考鶴祝

十月二日依 作此上

庭法章 時雨晴陰 見殘菊 朝霜 寒樹交松  
推穿 冰吹 依 池水鳥 河干鳥 連日雁鳥行  
同月九日當代系勤依 作獻上月日即高座而題也

松霜

同月廿四日希多中以回社 作下則献土

冬月 汝 此鳥 鶯 深夜 露 冬竹 冬山

明治三年六月十三日御當座献上

夏月 風 露 朝 夕 山 野 河

田 木 鳥 虫 衣 舟 祝

同日御内儀

夏草 夕顔 林蟬 国扇 御涼 夏夜 池

富士 夏旅 梅共 湖電 對鏡

明治三年七月十三日御當座献上 後撰句歌

秋多 月 日 夕 秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

秋 月 夕 秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

七 月 夕 秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

わが心く 秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡

母房之方 秋上歳 夕顔 梅共 湖電 對鏡





勝 鷄 月 氷 雪 山 松  
法 龜  
余三首由  
口平二首也

明治三年十一月御當座献上

十七首

野天 星風 谷岩 田海 鷄 車

貝 杉 栗 藻 書 弓 絲

女房

霞 柳 楓 桂 葵 萱 菖 蓼

庭 月 鳥 鴛 舌 衾 蓆

鷺 琴 社

明治三年十二月十三日御當座献上

雪未深 月前雪 雪散風 遠山雪

樵路雪 冬橋雪 海邊雪 市中雪

夜窓雪 松上雪 雪中鳥 雪中望

名所雪

女房

淺雪深 積 朝 夕 夜 山 林

野 路 浦 里 庭 竹 松 杉 望

明治四年

同年七月十三日御當座

御製

萩

薄

蘭

檜

露

虫

朝

夕

夜

拙

道

橋

海

國

窓

硯

鏡

女房

風

雲

山

谷

野

原

池

河

浦

島

里

市

庭

書

笛

筵

筏

同年八月十三日

實則

雜月

窓雨

籬草

嶺神

夜

燒燈

雜心

社頭

女房

若菜

鶯馴

柳露

栽花

新樹

郭公

七夕

澤月

山鹿

紅葉

時雨

千鳥

竹雪

水鄉

野旅

松風

池亀

同年十月十三日御當座

朝霜 夕霜 野外霜 樵路霜 庭霜

朝寒草 夕寒草 野外寒草 行路寒草 庭寒草  
冬朝 冬夕 冬野 行路冬 冬庭

女房

落葉 朝落葉 夕落葉 夜落葉 山落葉

寒草 谷寒草 森林寒草 野寒草 庭寒草

冬月 杜冬月 野冬月 河冬月 閏冬月

千鳥 曉千鳥 江千鳥 遠千鳥 浦千鳥

水鳥 池水鳥 瀨水鳥 水鳥多 水鳥馴

同年十二月十日

月前雪 通日深 淫夜 落群山 常盤木

夕鷹狩連日 風 野外 狩場風

早梅並風庭 梅香春 先春開 年內

女房

月思牙 暖山 行路朝 冬橋 河也

庭之深 夜忘 松上 依侍人 名吹

夜埋火 深夜 園 野大忘冬 聖春

向 炉邊閑話 海也 冬鶴

冬夜去 夕山 野風 海也

冬植物 動物 雜物

同五年二月十日 御當座

柳年春 岳系 靡風 常露

夕青 行路 水也 遠村

女房

柳風 夕 路也

池 門 水也 春月

霞夜、勝夜、春夜、濱春、  
春曙、山、岡、  
江、河、浦、都、

同年三月十三日御當座  
在行幸出

静見花 夜思、月前、戩風  
夕山、淳水 隣家、寄、雜

女房

<sup>盛花</sup>見、翫、折、遠、近、曙、朝、  
夕、夜、山、岡、杜、野、池、  
里、都、庭、本、句、錦、主  
同年四月十九日茂山頃内仍天望

谷鶯 糸櫻 雲雀 盧橋 路薄  
浦月 擣衣 寒草 樵夫 河筏

同年四月十三日御當座

卯花盛開 卯花如月 卯花似雪 夕對卯花  
遠見卯花 野徑卯花 水邊卯花 卯花為垣

女房

新樹風、露、山、岡、林、  
庭、卯花盛、夕、夜、路、  
里、岸、垣、夏雲、露、  
山、野、田、川、海、  
鳥、虫、花、松

同年五月十三日御當座

早苗

棟

五月雨

水鷄

照射

螢

蚊遣火

夏月

夏草

瞿麥

扇

泉

夕顏

二位以下法理

皇后手献上

柳

明治三年十月 伴於貫以卷又

世首

冰初解

子日

青柳風靜

餘寒月

紅梅

歸尸成字

禁中花

近子規

雨後早苗

水鷄

螢似玉

瞿麥帶露

栽草花

小鷹狩

虫聲非一

都月

秋夜長

菊盛

隣持衣

暮山時雨

寒芦風

薄氷

庭初雪

爐邊閑談

名所山

名所河

山家眺望

旅宿燈

嶺松

鶴馴砌

明治四年二月

靜寬院宮<sub>上</sub>獻上

五十首

霞知春

餘寒風

梅盛開

行路柳春草短

遠歸雁

漸待花

靜對花

花浮水春日遲

澤杜若

兼惜春

朝更衣

夕印花郭公幽

郭公遍

夏草深

螢過窓

六月菽荻告秋

七夕契

草花早

虫声滋

鹿驚夢田稻妻

未出月停予月

欲八月

槎上霧菊帶露

暮秋雲夜落葉

閑庭霜

池水鳥

篠上霰

都初雪連日雪

歲暮近

忍淚忘

契久忘

後朝忘立名忘

被忘忘

恨絕忘

松積年

山中澆江上舟

羈旅里

市商客

寄神祝

同五年六月十日

靜寬院宮<sub>上</sub>獻上

五十首

連峰霞

冰解若菜

梅

柳早蕨

浦春<sub>春</sub>月<sub>月</sub>

待花曙花

尋殘花

雉松藤

更衣卯花

郭公頻橋

曳菖蒲早苗

夏月涼早秋到織女別

荻

秋夕風夜虫

鹿山月野月水鄉月

鳴霧河紅葉

木枯橋上霜寒草池水馬  
雪鷹狩埋火言出五  
契五逢夢五後朝五  
頭五恨五山館竹行路  
旅望遠帆塩屋烟祝

明化五年十月使見宮道入

十五首

初春霞朝鶯庭花河山吹郭公  
夕納涼秋風名夷月山如畫沈水  
初雪流水松久錄浦鶴穿道祝

同六年

五十首

朝山霞杜霞野邊霞霞繞樹霞春衣

聞鶯晚更鶯閑中鶯竹鶯鶯呼容

苦木梅折梅梅似雪梅遠句梅移水

朝柳夕青柳遠柳池邊柳門柳

野春草路春草岡春草岸春草庭春草

瀧月春曙月春夕月春夜月峯春月

歸雁曉歸雁晚歸雁田歸雁歸雁連

春駒春駒嘶原春駒牧春駒澤春駒

待花漸待花花未開尋花遙尋花

春天象春地儀春池春人事春神祇

明治七年月夜所歌會集題

三日

二月 雁始行身

鳥出谷

十三日

三月 梅遠意

藤原鎌足

九日

四月 雁連雲

朝見花

岳柳臨水

五月 新樹露

竹為師

岡龍

六月 庭夏草

採早苗

車胤聚堂

七月 郭公數聲

晴天鶴

明雀麥勝裏花

八月 松下泉

西風飄一葉

懸氣船

九月 竹花色々

名滅山

海上月

十月 濁虫火

折菊贈人

高山止之

十一月 紅葉淺收

電信機

行旅時雨



十節 池水似鏡 深夜空雪

寄神祇祝

同八年同上

二日

十日

九日

一月

水邊若菜

二月 雪中梅

筆寫人心

海上霞

三月 鶯

岸春草

藤原百川

四月 松間花

春月

野遊

五月 練兵

水邊藤

庭新樹

六月 雨中郭公

短夜月

遠村煙

七月 夕立雲

池蓮

避暑者

八月 庭斯燈

扇風秋返

法良

九月 萩野芳夏

月下交遊

草花露滋

十月 岡鹿

林子平

菊

十一月 葛籠葉

時雨晴陰

尾德

十二月 浦干鳥

屋上無歡

寄國祝

同九年同上

二日

十日

九日

一月

待早鶯

二月 柳糸絲新

氷解

逢友述志

三月 梅紅白

源光園

岡早蕨

四月 每朝見花

春曙

雲雀清夜

五月 兩後苗代

西望遠鏡

新牛

六月 郭公竹方

廬樹風

溫泉

九日 四曆正月

四日 立春 九日 二月

九日 三月

九日 四月

九日 五月

九日 六月

七月ヨリ六月  
 七月 明自表露  
 七月三夜 十九日ヨリ七月  
 八月 馬車  
 十八日ヨリ八月  
 九月 朝露  
 十七日ヨリ九月  
 十月 庭上青  
 七月ヨリ十月  
 十月 庭上青  
 十六日ヨリ十一月  
 十一月 寒樹

水上堂  
 泉入夜琴  
 薄村々  
 日本武尊  
 鶴拂霜  
 窓前雪  
 垣夕顔  
 諸葛亮  
 聞貴  
 風送葡萄香  
 フランクリン  
 佛蘭格林  
 寄道祝言

同十年同上

二日 十日

九三日

一月

二月 水樹多在趣 名所霞

牛間鷲

三月 餘寒 平信長

草漸青

四月 遠山花 春夕

海邊眺望

五月 因躑躅 照影

待郭云

六月 谷松 檜

梅雨久

七月 水鶏 行跡之立

林燂

八月 鄭成功 野外秋

以利沙伯

九月 戶外秋風 護良親王

花次月

十月 秋與 西勢中雁

熊

十一月 朝紅葉 庭宇常寂

氷姑結

十二月 沁水鳥 山度空

山

初鄭森上同知森八前名三後成功ト改ト相見三付鄭成功ト改ト以云上ノ

明治九年 靜寬院宮月次由音會中兼題

御定日五十月云々

一月

新年見鶴

天象

早梅

對鏡

若菜知時

二月

寒過春未

巖殘雪

名夾眺望

園篁

隱士出山

三月

柳臨池水

紙衣式部

春雨

行客吹笛

野外雉

四月

笑日對花

春月

遠情

萱菜未多

水邊蛙

五月

折藤

牡丹

垣卯花

杜新樹

障里鷄

六月

郭公一聲

行路及早

螢照細流

七月

困中日長  
樹陰轉  
河內涼

明麗  
中扇  
清風入  
窗

秋友

八月

殘暑  
野露

初秋衣  
秋半旋

橋上苔

九月

炎為夜友  
月過雁

渡祥舟  
逐夜月明

秋雨打窓

十月

晚閑鷄  
山疏菊

浦擣衣  
紅葉留人

白鷺立洲

十一月

寒夜重衾  
寒山

初冬時雨  
掛槌水

中約言藤房

十二月

雪似花

池北鳥  
為君彩世

雅柴山嵐

同十年同上 月中三度ノ由

一月

雪松樹花

玉

梅也春家

二月

冰

都霞

名灰河

三月

鶯

靜女

深夜歸雁

四月

踏早履

見花延歡

春日曙

五月

桃花

苗代

旅行

六月

印花盛久

郭云

閑庭梧

七月

夕顏

顏淵

夕納涼

八月

早涼至

早涼至

淺草

九月 秋虫

秋望

庭月

十月 擗衣

松下菊

秋霜

十月 葛

秋琴

藻

十月 朝時雨

神樂

歲暮祝



